

## 『道法會元』におけるパーツの意味の整理と傾向の研究

西郷 智帆

近年、多くの古典文学や歴史資料が、その保存と利用を目的として電子化されているが、様々な資料の電子化は、研究に利用されることを目的として進められる必要がある。すなわち、それらの資料の電子化に際しては、原資料に近い形で保存するだけでなく、研究への利用が容易になるよう、資料の特徴を活かした電子化を行うこと、および研究支援ツールを備えることが求められる。

本研究では電子化された『道法會元』を対象に研究を行う。『道法會元』は、道教における様々な宗派によって伝えられた、雷法を始めとする道教呪術儀礼の文献である。『道法會元』には様々な図が含まれており、特に「符」は、符の全体像を示す「聚形符」と、その「聚形符」を構成要素ごとに分割して各要素に説明文を付与した「散形符」からなる。この『道法會元』は宇陀・松本研究室の共同で電子化が行われ、分析支援機能や用語統制に関する研究などが行われてきた。さらに、『道法會元』巻 56 以降における全ての符を入力したデータベースが作成され、『道法會元』全体を対象とした研究が可能となった。

本研究では、『道法會元』における「散形符」の構成要素であるパーツの説明文に含まれる名詞について整理を行った村上の先行研究をもとに、村上によって作成された表に対して、表の見直しと訂正およびその表を用いた分析を行った。表の見直しおよび訂正においては、村上が作成した表を用いて整理の対象とされなかった名詞について新たに代表名を付与し、すでに代表名が付与されている名詞のうち問題が見つかったものに対してはその代表名の変更を行った上で、新たに表を作成した。本研究において作成された表により、同じ意味を持ちながら互いに異なる表現がなされている名詞や、互いに関係があると考えられる名詞について検索することが可能になり、『道法會元』データベースにおける検索の効率化に役立つと考えられる。

また、表の分析においては、表の見直しによって作成した表をもとにいくつかの特徴的な名詞について分析を行い、その名詞に対して巻による出現頻度や『道法會元』での分布の偏りについてその傾向を検討した。例えば「北斗七星」を指す名詞としては、「北斗」や「北斗七元」といった名詞よりも「貪巨禄文廉武破」などの表現の方が出現頻度が高く、また、巻による傾向では、「貪巨禄文廉武破」などの名詞は『道法會元』の巻 56-268 において広範囲に分布し、「子辛子寅子真子恵子憐子戊子庚」の名詞は巻 171-255 の間には出現しないなどの特徴がみられた。このような各名詞の出現傾向は、離れた巻同士の間関係の分析の指標となりうる一方で、『道法會元』における巻のグループ分けに役立つと考えられる。そして、そのような巻の相互関係を分析することは『道法會元』における呪術の系統を探るための手掛かりになると考えられる。

(指導教員 松本浩一)